

半生の反省



井原敏博

熊本大学大学院先端科学研究部
[860-8555] 熊本市中央区黒髪2-39-1
教授, 博士(工学).
専門は核酸化学, 分析化学.
<https://www.analyticalchemistry-ihara-lab.com>

ライフ・ワークバランスにおいて、誰かの手本になる存在ではなかったことは自信をもって言えます！唯一、若い読者の反面教師となる資格はありそうなので、以下、タイムマシンが開発された暁には書き換える予定の過去を記すことにします。

妻は英文学を専攻し、結婚時は高校教師でしたが、互いの親の住まいは遠くサポートが期待できないこと、私は出張が多く仕事を休むのは基本的には日曜日のみ、帰りは深夜になることなどから妊娠をきっかけに退職し、専業主婦となりました。能力の高い女性を家庭に留めてしまうことに罪悪感を感じましたが、彼女の決断でした。そのこと自体、子供たちにとっては贅沢な生育環境を可能にしたことは確かです。

家族との時間は楽しく多くの時間を共有したいという気持ちはありましたが、「研究者としての生き残りをかけて……」というのが自分への言い訳でした。体力のない妻でしたが、私の仕事を理解して家庭の切り盛りを孤軍奮闘してくれました。もちろん当時の私は彼女を孤軍にしたつもりはなく、おむつ替え、風呂掃除、食後の後片付け、ゴミ捨てなど、“頼まれたこと”は都度何でもやりました。それで協力的な夫を自認していたのです。いま考えるとイタイ“イクメン”です。指示されたことなら小学生でもやりますから。その仕事を所有すること(計画・実施すること)こそが家事分担であるということに気付いたのは最近のことです。

唯一例外的だったのは、米国留学の期間です。生活のペースが少し緩やかになり、家族と過ごす時間を確保できた貴重な1年間でした。9.11直後のニュージャージー州(マンハッタンは対岸)では、人々はまだあの惨事からの回復の途上にありました。制度上、外国人に対するいくつかのハードルがありましたが、生活のセットアップ、子どもの予防接種など、ここでも妻は我が家のエンジンであり八面六臂の大活躍をしました。子供たちもそれぞれ現地のキンダーとプリスクールに放り込まれ、苦勞もしましたが楽しく逞しく乗り越えました。私も夕方に帰宅し、毎夕食をともにして家族でたくさんの会話をし、子供たちの成長に目を向けることができた時期でもあります。アメリカでの生活は私たち家族にとってもかけがえのない思い出となり、子

供たちとともに過ごす時間の大切さを実感することができました。

それもつかの間、帰国後は再び忙しい日常に戻り、教授に昇進したこともあり、ますます仕事に追われる日々となりました。私に少し心の余裕ができた頃には、子供たちは進学のために家を離れていきましたので、私は自分の時間を取り戻すように趣味に没頭するようになりました。自転車(ロードバイク)は私の大切な趣味となり、ウィークデイは出勤前に早朝からひとりで、週末には仲間と毎週のように遠出をしていました。多少マゾ的気質があるのか自分を苦しめるところまでやらないと終わらないのです。そんなある日、顔面を強打し、前後の記憶がなくなるほどの転倒事故を起こしてしまいました。妻に心労をかけ、Zoom上で家族裁判にかけられ、有罪(通勤以外の自転車禁止命令)が確定しました。

私に大きな変化をもたらしたのは、3年ほど前に妻が大病を患ったことでした。それまで家族を、そして研究者としての私を支えてくれていた妻が突然病気になる、心配と不安で心が潰れそうになりました。自分がどれほど妻に頼ってきたかをあらためて認識する機会になりました。妻が回復に向かう中で、朝寝して体力を取り戻してもらいたいという思いから、私は毎日の朝食を作ることを決めました。これまで料理をする機会がほとんどなかった私にとっては、まあまあハードルでしたが、いままも続けています。終わりなき単調な家事を続けることの意味を理解しました。子供たちから嫌われているとは思いませんが、間違いなく、「パパのような人生は嫌だ。」と考えていると思います。せめて15年前にこの境地に達していたら彼らの人生観・家族観もいまとは異なるものになっていたかもしれません。

仕事と私事のバランスの最適解は家族の数だけあると思います。そもそも、“やっている”という認識も主観に過ぎませんから。散歩の途中、このエッセイの執筆を依頼されたことを言うと、妻曰く「あんた私事ないやん、なに書くの?」。つまり上記の内容も私の主観に基づく独りよがりなようです。彼女がこのエッセイを読まないことを願っています。